

R-1

森の動植物に出会う幼児は自然体験活動から何を磨くのか（2）

－特性を持つ5歳児の手の平や手指の動きを観ることから考察する－

How infants who encounter forest flora and fauna are refined from experience in nature. (2)
A study of characteristics 5-year-old children hold while using palms and fingers to observe.

○梶浦恭子（愛知東邦大学）

本研究は、親子や家族で自然体験活動に参加する5歳児 Rai 児を対象とし、手の平や手指の動きを観ることから、どのような幼児期の発達と教育的体験を積んでいるのかを分析し考察する。Rai 児は、手に小枝を持つと、武器に見立て保育者に向けて遊び、気に入る長い枝は持って歩くことや大きく振る等と、思い立つ行動をすかさず行う。目の前に大きな石を見つけると、持ち上げて樹木に投げる場面も見受けられ、方向づける言葉で動きの提案を保育者はしている。だが、制限され制止されると、「やりたいたいことができないと泣く、怒るなどの情緒的な反応を示す」という幼稚園教育要領解説の記載のように幼児期の特性といえる行動が、Rai 児には、体験のさまざまな場面で顕著にみられた。2021年7月25日の事例で、枝を持ち歩きながら枝を振る Rai 児は、虫好きの A 児に枝振り行動を「虫が捕まえられんから止めてくれないか」と止められ、その後、小動物のミミズを指で持ちあげる A 児を見た後、Rai 児も同じように指に触れ手のひらにのせる動きをし、Rai 児は「ミミズかっこいい」の発言をする。その日初めて会う5歳児 A 児との関わりと森体験から生まれたミミズへの発言に、Rai 児は何を伝えたかったのか考察したい。

R-2

野外教育における情報端末を用いた体験創出に関する実践報告

A report on the experience creation using devices in outdoor education

○甲斐知彦（関西学院大学・情報科学芸術大学院大学）、西垣幸造（公益財団法人 日本アウトワード・バウンド協会）、伏田昌弘（東京コンピュータサービス株式会社）、平林真実（情報科学芸術大学院大学）

我々は情報端末を用いて、AR（拡張現実）などを利用した自然の中での活動を実施し、創造社会といわれる Society5.0 における野外教育の在り方を模索している。体験教育の一部である野外教育で実施される活動は、体験学習サイクルにおいて学びの起点となり、その質は重要である。野外教育の歴史を振り返れば、その起点は1911年に乃木希典が実施した学習院でのキャンプとされており（諸説あり）、その時期は Society3.0 といわれる工業社会にあたる。そして、時代は Society4.0 といわれる情報社会を経て、Society5.0 に突入し、社会は大きく変化している。しかしながら、キャンプ場面では、Society5.0 といわれるサイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を積極的に融合させた活動などは現在のところみられない。そこで、本報告では、野外教育の分野では一見なじみのないテクノロジーを自然環境に持ち込み、自然における体験を新たに創出することを試みた実践事例を紹介する。